



Title	献辞
Author(s)	長岡, 新吉
Citation	経済學研究, 35(4)
Issue Date	1986-03
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/31720
Type	bulletin (article)
File Information	35(4)_Pv-vi.pdf



[Instructions for use](#)

献 辞

経済学部の歴史は、昭和22年4月創設の北海道大学法文学部の経済学科に始まる。昭和25年4月法文学部は文学部と法経学部に分離し、3年後の昭和28年8月、法経学部の二つの学科（経済学科と法律学科）はそれぞれ独立の学部（経済学部と法学部）に分離独立した。以来、経済学部は独自の流れを形づくり、その水量を豊かにしながら今日に到っている。

このわが学部の歴史とともに歩んでこられた石垣博美教授が、本年3月31日付をもって定年退官となり、北大を去られることになった。名残は尽きず、寂しさはひとしおである。

石垣教授が北海道大学法文学部の助手として本学に勤務するようになったのは、昭和23年12月である。東京大学経済学部を御卒業になられて3カ月後のことであり、本学に法文学部が創設されてまだ2年に満たない時期であった。4年後の昭和27年9月、教授は文学部と分離後の法経学部の助教授になられ、翌年8月の経済学部の独立によって12月同学部に配置換えとなり、43年1月教授に昇任された。このとき、教授が本学に勤務されてからすでに19年を経過していたのであるが、教授はそれからさらに17年余にわたってわが学部の重鎮として研究と教育に情熱を注いでこられ、その在職期間は都合37年と3カ月の長きにわたっているのである。教授が仮に本学における“自分史”を語られるとしたら、それはほとんどそのまま草創以来今日までの経済学部の歴史を語ることを意味する、といってもいいすぎにはならないであろう。

教授の御専攻は経済学史である。学生時代大塚久雄教授の演習に一時属しておられたこともあって、早くから〈歴史〉に深い関心を抱いてこられた教授は、本学に御着任後、その才能を欧米の経済学説史の研究の中に全面的に開花させたのであった。その出発点となったスミス、リカードを中心とする古典派経済学の研究は、昭和36年の学位請求論文『古典経済学研究』に集大成され、教授はこれによって翌年3月経済学博士の学位を授与された。

教授の学問の道筋はやがてマルクスに到達する。1857年から翌年にかけてマルクスが書き綴った8冊のノートが『経済学批判要綱』Grundrisse der Kritik der Politischen Ökonomie (Rohentwurf)として1953年東ドイツで公刊されると、教授は早くも『要綱』と『資本論』の異同に着目され、その視点からマルクスの価値形態論と原始的蓄積論に新たな光を当てた論考を相ついで発表されたのである。宇野弘蔵博士の学風を自からの学問のうちに取り込まれたのもこの頃であった。その後、教授は、イギリスの法学者ベンサム思想の日本への影響に関する鋭い洞察に満ちた論文を公にされておられるのであるが、これは、教授の問題関心が、この時期日本近代の経済学説の思想史的解明にも向けられつつあったことを意味してもいたのである。そして近年、教授の経済学史研究の主要対象は近代経済学に移行しつつあるように見受けられる。講義および演習において、教授はこの分野においても造詣の極めて深いところを示しておられるのである。

このような、古典派経済学、マルクス経済学、近代経済学を横断する教授の巾広い学殖を支えたものこそ、いくつかの貴重な翻訳のお仕事にも表われている教授御自身の抜群の語学力にほかならない。そして、それは同時に、国際的な学术交流に寄せる教授の熱い想いの原動力でもあった。昭和38年7月から2年間のオーストラリア滞在以降、アメリカやオーストラリアの諸大学において数多くの講義、研修を経験してこられた教授は、本学における国際交流事業の中心に位置して、その推進と発展に多大の貢献をなされてきたのである。

教授は経済学部において一貫して御専門の経済学史を講じてこられ、その優れた内容と明るい親しみやすいお人柄の故に、教授の演習に参加し、卒業して社会で活躍中の人材は、おびただしい数にのぼっている。また、学内行政面でも、昭和48年8月から翌年2月まで評議員、昭和55年1月から56年12月まで学部長の要職にあって本学と経済学部の発展に貢献してこられた。昭和50年代後半からの文部省大学国際交流調査研究プロジェクト委員会委員、大学基準協会国際交流委員会委員としての学外での御活躍も、まさに教授なればこそのことであった。さらに、教授は北海道アメリカ学会の会長として昭和55年以降毎夏開催のアメリカ研究札幌クールセミナーを主宰されて日米の学术交流に力を注がれるとともに、オセアニア学会、北海道経済学会の理事としてこれら学会の発展と充実に力を尽された。

経済学部の歴史を創り、そして長年にわたりそれを見据えてもこられた教授は、まさにわが学部の長老と呼ぶにふさわしい存在であられる。しかし、教授の御容姿は“長老”の語の喚起するイメージからはほど遠い。テニスとスキーに語学力と同様抜群の技倆をお持ちの教授は、瀟洒な雰囲気をつねに身に湛えておられて、いまなおお若い。御退官後もその若さをいつまでも保持され研究と教育の両面で一層御活躍下さることをお祈りしつつ、以上まことに粗辞ながら、教授に献ずる記念号の序とする。

昭和61年3月

北海道大学経済学部長 長 岡 新 吉